

平和

古堅中学校三年一組

上江洲

絵蓮

「平和」とは一体何なのでしょうか。私が生まれた国、時代は「平和」だと言われています。しかし、今から六十七年前、ここ読谷村で「平和」とはほど遠い出来事があったのです。

私は、六月二十三日の慰霊の日に戦争体験者の曾祖母に沖縄戦のことについて改めて聞きました。曾祖母は、沖縄戦は古堅尋常高等

小学校高等科一年の時にいき、とてまっらい過去だと話してくれました。一九四四年、古堅国民学校にも日本軍が駐屯し、十・十空襲の前には曾祖母の家にも兵隊が五、六人入ってきました。一番座、二番座には曹長や軍曹が住み、曾祖母家族はひそひそと台所に住んでいたといふこと。自分の家なのにひそひそと暮らすのは、今では考えられないこと。です。

一九四四年十月十日

その日の朝です。

曾

祖母と妹は始め、米軍の空襲とは知らず友軍の演習だと思つて屋敷内の木に登つてその様子を見ていたそうです。その後本物の空襲だとはわかつた二人は大急ぎで防空壕の中にとび込んだのを六十七年たつた今でも鮮明に頭に焼きついていると云ふ事です。

一九四五年三月二十三日から連続空襲に見舞われ、曾祖母家族はヤンバルへ逃げようとして準備をしていました。しかし壕から出たときたん空からパラパラと聞こえたので、すぐ近

くの壕に戻つた時、壕のすぐ前に爆弾が落ちたそうです。その時、爆風の衝撃で気を失ひ、しばらくくして気がつくとき曾祖母一人、取り残されていたもので、とても不安で、さきに壕から出たそうです。しかし、空にはまだヘリコプターがパラパラと飛んでいたので、壕に戻りました。すると、曾祖母の足には数え切れぬほどの爆弾の破片が足に刺さつていたのです。それをも曾祖母は必死でヤンバルへ歩いていき、ヤンバルに着く頃には、化膿して

蛆がわくほど悪化していたのです。それが一九四五年の何月何日かは覚えていないけれども、命からがら逃げました。その日が私にとつての終戦でした。たと曾祖母は強く言っていました。

曾祖母の話によると、戦時中は、芋しか食べられない時期があったそうです。今の私達からすると、想像さえつきません。しかし、私達古堅中学校の生徒は、六月二十二日に芋と雑炊の給食をいただきました。しかも、一

人一人の量は少なく、まるで戦争中の食事を食べて、戦争について考えて欲しいという思いが込められていたりとしみじみ感じました。また、世界中で飢餓を苦しんでいる人が多勢いる中、こうして毎日豊富な食料を食べることができるとはすこく幸せだと思えます。今、戦争体験を話せる人は少なくなっています。十年後、二十年後もこの恐ろしい体験を忘れて欲しくない。私はその思いで曾祖母の話を書きました。でも、忘れたい下さない。

体験を話すという事は、本当は思い出したくないものを思い出させるという事を。そして、多くの人が両親を失ったという事を。

だからこそ、私は思う。世界から、戦争がなくなればいい。世界から、戦争という言葉がなくなればいい。そういう日が訪れたら、沖縄が、そして世界が、平和になつたという事でしょう。

私達にできることは、限られているかもしれませんが、できません。でも、できる事の一つとして、こ

の沖縄であつた悲惨な出来事を忘れず、伝える続け、多くの犠牲者の冥福を祈り、平和を願ひ続けることだと思ひます。